

4

春日井

春日井市立西部中学校

ツチカワ シオリ
名前 土川 詩織

分科会番号 1

分科会名 国語教育（作文その他）

研究題目

自分の考えを論理的な構成で表現できる生徒の育成を目指して
～第2学年 意見文の作成における根拠の吟味を中心に～

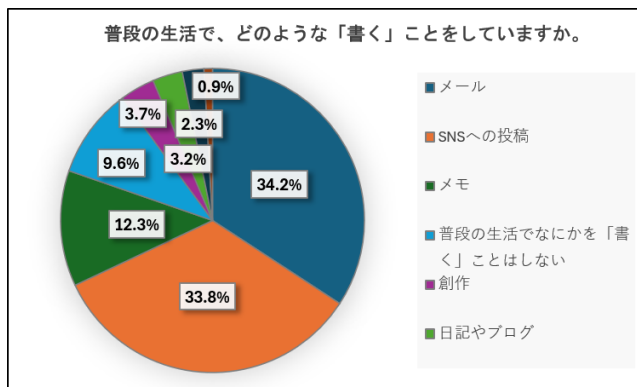
1 主題設定の理由

近年、教育現場では、中学生の文章力の低下を懸念する声が上がっている。その要因は一つに特定されるものではないが、時代の変化に伴う特に大きな要因として、「SNSの発達によるコミュニケーションの短文化」「電子機器の普及による漢字変換機能への依存」などが挙げられる。

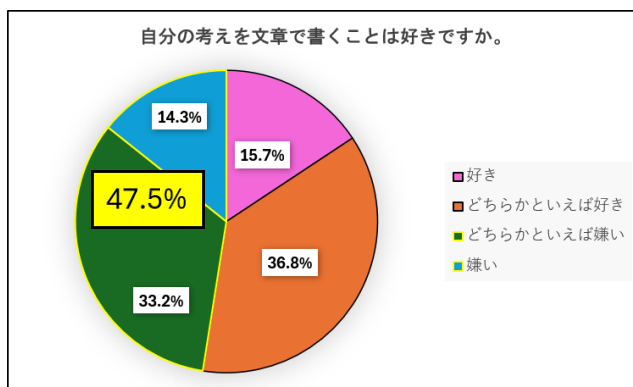
これらの現状を踏まえて、本校の2年生の生徒256名に事前調査アンケートを実施したところ、普段の生活で「書く」ことをするのは、34.2%が「メール」、33.8%が「SNSへの投稿」であり、日常的に論理的な文章や長文を書く機会は少ないということが明らかになった（資料1）。また、自分の考えを文章で書くことが「嫌い」「どちらかといえば嫌い」と感じている生徒は、あわせて47.5%に上った（資料2）。

中学校学習指導要領解説国語編においては「中学校では、伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや、複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価することなどに課題があることが明らかになっている」と述べられている。

本研究では、中学校2年生の国語の時間において、時代の変化に伴い日常的に論理的な文章や長文を書く機会を失いつつある中学生が、時代の変化に対応しながら論理的な構成で表現できる文章力を身に付けていく方法を探ることを目的とし、主題を設定した。



【資料1】事前調査アンケート①



【資料2】事前調査アンケート②

2 研究の方法

(1) 研究の目標と目指す生徒像

意見文の作成における根拠の吟味を中心として、自分の考えを論理的な構成で表現できる生徒の育成を本研究の目標とし、目指す生徒像を次のように設定する。

【目指す生徒像】

自分の考えを論理的な構成で表現できる生徒

(2) 研究の仮説

目指す生徒像に迫るため、以下の二つの仮説を立てた。

仮説1

原稿用紙の使い方や言葉の使い分けを学び、クラスメートと推敲し合うことによって、より分かりやすい意見文を書くことができるようになるだろう。

仮説2

筆者の意見に対する自分の意見を文章にまとめることによって、筆者の意見を的確に捉え、それに対する自分の考えを論理的に組み立てて書くことができるようになるだろう。

(3) 仮説に対する手立て

① 仮説1に対する手立て

ア 作文の基本ルールについての調べ学習

段落や記号の使い方、書き言葉などについての調べ学習を行い、自信をもって意見文に取り組ませる。

イ チェックポイントを活用した自己添削

意見文の作成における自己添削用のチェックポイントを活用して、原稿用紙の使い方や適切な表現が使われているか等について、自身の意見文の添削を行う。

ウ 相互推敲と意見文の書き直し

イで使用した、自己添削のチェックポイントを活用し、自己添削と同じ基準で、クラスメートの意見文の推敲を行わせる。

② 仮説2に対する手立て

エ 筆者の論理分析と構成メモの作成

筆者の主張とその根拠を明確に読み解き、ICTを活用して自分の意見を支える根拠となるような情報を収集させる。これらをもとに構成メモを作成させ、意見文の執筆計画を立てさせる。

オ 執筆した意見文の工夫点の言語化

一連の活動を通して習得した知識や技能を、他の場面でも活用可能な資質・能力として定着させるために、自分の意見文における構成や表現上の工夫点を振り返り記述させる。

3 研究の実際と考察

(1) 仮説1

手立てア 作文の基本ルールについての調べ学習

「既習事項の学び直し」の調べ学習を通して、生徒は自分自身の文章が正しいかどうか判断する基準をもつことができた。その結果、机間巡視中によくある「マスの使い方は合っているか」「段落を新しく始めたい場合はどうすればよいか」などの原稿用紙の使い方に関わる質問が減少し、内容面などの本質的な指導に時間を充てられるようになった。

手立てイ チェックポイントを活用した自己添削
作成した意見文を「推敲・添削チェックポイント」で確認しながら、自らの文章を自己添削する活動を行った(資料3)。この「推敲・添削チェックポイント」を使用し、行った活動は以下の通りである。

【形式・基本のルールの確認】

手立てアの調べ学習で確認した、原稿用紙の使い方について確認したり、話し言葉を適切な書き言葉に書き直したりした。

【文章の構成の吟味】

主語と述語が一致しているか、一文が長すぎて伝えたいことが不明瞭になっていないかを吟味させ、読み手にとって分かりやすい文章の構成を意識させた。

手立てウ 相互推敲と意見文の書き直し

自己添削を終えた意見文をさらに洗練させるため、2～3人のグループによる相互推敲を行った(資料4)。相互推敲の活動時も、自己添削と同じチェックポイントを用いた。

クラスメートから、直接アドバイスを書き込んでもらう事によって、自分では気付きにくい客観的な視点に気付かせることができた(資料5)。

相互推敲の活動を経て、クラスメートからの意見を反映させた意見文の書き直しを行うことで、他者の意見に触れ、多くの改善点が見いだされた。これらの実践における最も大きな成果は、生徒の意識が「自分が伝えたいことを書く」段階から「自分が伝えたいことを読み手に理解してもらえるように書く」という段階に変化したことである。事後調査アンケート(資料6)では「文章を書くときに、以前と比べどのような工夫をするようになりましたか」という問いに対し「友達にアドバイスをもらう」「文

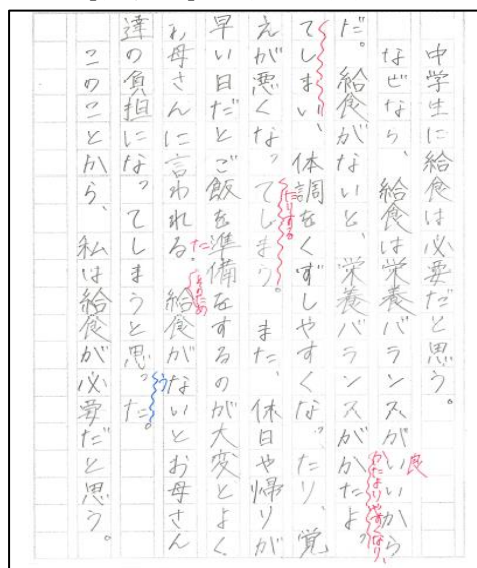
推敲・添削チェックポイント

- ・原稿用紙の使い方は正しいか。
- ・書き言葉でかいているか。
- (例) ～じゃないーではない
- ・正しい言葉の使い方ができているか。
- ・主語と述語は対応しているか。
- ・文が長すぎないか。
- ・文末は統一されているか。「です・ます」か「だ・である」なのか。

【資料3】 推敲・添削チェックポイント



【資料4】 推敲を行う様子



【資料5】 生徒の意見文

をよく推敲する」などと答えた生徒が多くいた。

生徒の振り返り(資料7)からは、意見文を書き直すことで自分の文章の読みづらさに気付いたり、一回目で上手くいかなかったところを二回目は工夫したりすることができていることが分かった。以上のことから、これら一連の活動によって、論理的な文章を書く上で、文

章の形式を整えるだけでなく、筋道を立てて読み手に分かりやすく伝えることに対する意識が高まったと考えられる。そのため、自分の考えを論理的な構成で表現する上で、有効であった可能性が示唆された。

(2) 仮説2

手立てエ 筆者の主張の論理分析と構成メモの作成

自分の意見を構築する前段階として「モアイは語る―地球の未来」の筆者の主張とその根拠の読み取りを行った。また、筆者の主張に対する自分の意見文を書く準備を以下のようにさせた。

(Ⅰ) ICTを活用した「調べ学習」

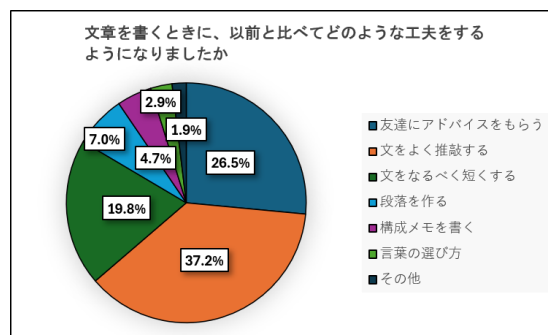
ICTを活用して調べ学習を行い、自分の意見の根拠となるような情報を収集した。また、「頭括型」「尾括型」「双括型」についても調べ学習を行った。収集した情報を意見文に生かすことによって、意見文の根拠の客観性と説得力が高まるようにした。

(Ⅱ) 自分の立場と根拠の明確化

意見文を書く準備として、筆者の意見に対して「納得できた」か「納得できなかった」かの立場を明確にし、自分の意見を支える根拠を整理した。

(Ⅲ) 構成メモの作成

文章の型を決めて意見文のポイント(資料8)を参考に、構成メモ(資料9)を作成した。



【資料6】事後調査アンケート①

- ・推敲したり、添削してもらったりしたおかげで、一回目の意見文より二回目の意見文の方が、文章が分かりやすくなった。
- ・一回目の意見文を読んで、二回目は一文をだらだらと書かないように工夫することができた。

【資料7】生徒の振り返り

【意見文のポイント】

- ・筆者の主張に対する意見文を400字程度にまとめ、原稿用紙に記入しましょう。
- ・教科書の該当ページを参考にしましょう。
- ・教科書の内容だけでなく、自分の知識や経験(ニュースで見た環境問題、自分の生活での気付き等)と結び付けましょう。
- ・なぜそう思うのか、意見の裏付けとなる「根拠」を具体的に示しましょう。
- ・筆者の主張に対し、自分の立場を明確にしましょう。

【資料8】意見文のポイント

手立てオ 執筆した意見文の工夫点の言語化

自分が書いた意見文をただ「書いた」だけで終わらせるのではなく、どのような意図をもって書いたのかを「どのようなことに注意して、自分の意見を支える根拠を選んだか」「自分の意見を明確に伝えるために工夫した点は何か」という観点から記述させた。以下に、生徒が書いた工夫点の抜粋（資料10）を示す。

「モアイは語る―地球の未来」	
◎意見文を書く準備をしよう。	
①「意見文」とは？	明確な根拠と合わせて、自分の考えを述べた文章。
②筆者の意見に対する自分の立場を明確に示そう。（納得したorできなかった）	納得した。
③自分の立場を表付ける根拠を示そう。	広大な宇宙に浮かぶ地球は、森林資源が枯渇したとき、どこからも食料を運んでくることができない、という筆者の考えは事実だと思ったから。
④意見文の種類を調べよう。	【頭括型】最初に結論を述べ、そのあとにその結論を表付ける根拠を説明する文章構成。 【尾括型】最初に根拠を述べ、最後に結論を述べる文章構成。 【双括型】文章の最初と最後に結論を述べ、その間に根拠を挟む文章構成。
⑤構成メモを作ろう。	・④で調べた型について、どの型で書くかを決める。…頭括型 ・その他、意見文の内容を箇条書きで書く。

【資料9】構成メモ

- ・ニュースのことについて書くことで、説得力が上がり、読み手に伝わりやすくなる。
- ・根拠の後に自分の知識や経験を述べることで、自分の知識が事実であることと、本文に書いてある根拠とはまた違った視点で考えられ、自分の意見がより深まる。
- ・筆者と同じように、昔のイースター島と今後の地球を比較しながら意見文を書いた。

【資料10】生徒が記入した工夫点の抜粋

この活動を通して、文章の構成を考えて書くという意識が高まった。また、筆者の主張を正しく読み取った上で、自分の知識と融合させることによって、より深く考察ができるようになった。さらに、自分の意見文に対する工夫点を言語化することによって、他の文章を書くときにも役立つ論理的な文章を書く際の視点を身に付けることができた。

4 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

本実践では、生徒が筆者の論理展開を構造的に捉え、自らの意見文へ活用できるようになることに主眼を置いた。一連の活動を通じて得られた成果を、以下の四つの観点から総括する。

① 論理の構造の可視化による課題誤認の解消と論理の一貫性

筆者の主張と根拠を正確に読み取るため、グループワークを行い「モアイは語る―地球の未来」における筆者の主張の確認をさせた。また、構成メモ（資料9）を作成し、筆者の主張を構造化させたことにより、筆者の主張を表面的な印象で捉えるのではなく、自分の言葉にかみ砕いて内容を理解できるようになった。

② 型に当てはめて書くことによる意図的な文章構成の確立

構成メモを書く際に「頭括型・尾括型・双括型」という3つの型を提示し、自分の意見を最も効果的に伝えるための「型」を選択させた。そうすることによって、ただ与えられた枠を埋めるのではなく、文章構成を「文章の設計図」として捉えるという意識が向上した。単

に文章を埋めるのではなく、読み手に与える効果を考慮して構成を選択し、意図的な文章構成を確立することができたといえる。

③ ICTを使用した「意見」と「根拠」の関係性の深化

ICTを活用した調べ学習により、教科書内の情報(イースター島の事例など)に現代社会のニュースや具体的なデータを組み合わせたり、生活の中での自分の経験と照らし合わせたりする活動を行った。主観的な「感想」を客観的な「意見」にする上で、外部情報の取得や自分の経験を論理的な文章の構造に組み込むことの重要性が意識付けされた。

④ 意見文における工夫点の言語化による思考の過程の可視化

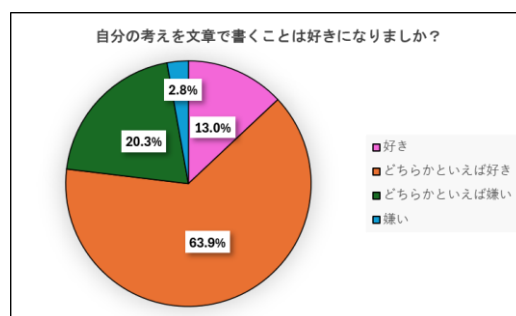
手立てオで実施した「工夫点の言語化」は、学習者が自身の思考の過程を客観視するためのよい機会となった。「主語と述語の対応を意識した」「一文を短くした」といった技能的な側面から「あえて反対意見(確かに～しかし～)を入れた」といった高度な工夫まで、自分の言葉で言語化できる生徒が増加した。生徒の振り返りにおいても「文章を推敲すること」「構成メモを書くようになったこと」に関する記述がみられた(資料11)。これは一過性の活動ではなく、今後他の文章作成場面でも活用可能な汎用的スキルとして定着したことが分かる。

- ・自分の意見を人にわかりやすく、丁寧に伝える力が身に付きました。自分が思っていることは人にはわからないことがあるので、友達にわかりやすいか、何が足りないのかなど、聞いたり推敲をしたりしてより読者にわかりやすく伝えられるようにしました。
- ・もともと意見文を書くのは苦手でしたが、今回の授業を通して、構成メモをつくったり、友達にアドバイスを貰ったりしたおかげで、自分が表現したいことをうまく実現できるようになったため、良かったと思いました。
- ・苦手だったけど意見文を書く練習をたくさんしたら、どうしたら早く丁寧にかけるのか、自分でわからなくなる前に何をすればいいのかなど解決策がたくさんみつかったので自分で何が足りないのかを理解する力も身に付きました。

【資料11】生徒の振り返り

(2) 今後の課題

研究の結果から、日常から論理の構造化に意識的に取り組むことができるようになった生徒が増えた一方、文章を書くことが嫌いである生徒も一定数いることが分かった(資料12)。そのような生徒には、より細分化された支援が必要である。そのため、今後は生成AIを活用して、添削をしたり、教師の支援を個別化したりしていくなど、個別最適な支援の在り方を検討していきたい。



【資料12】事後調査アンケート②

5 参考文献

文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編」(2017)